

みなさん、「手塩にかける」という慣用句を知っていますか。意味は、「自分で心から世話をすること」です。

僕は初め、この慣用句を聞いたとき、梅干しを心をこめて作っている人の姿が思い浮かんで、漬け物などを心をこめて作っている姿からこの慣用句が生まれたのだと思っていました。

でも、詳しくこの慣用句について調べてみると、「手塩」とは、昔の食膳に添えられていた少量の塩のことで、その塩は「手塩皿」と呼ばれる小皿に盛られていました。その塩には、不浄なものをはらうという意味の他に、自分の好みに合わせて塩加減をするという使い方もありました。

そこから、他人任せにしない、自ら世話をするといいことを「手塩にかける」というようになってきたようです。



今、こうして学習したり、授業の内容が分からなくならないように、テストでいい点が取れるように塾などへ行くことができるのは、自分を手塩にかけて育ててくれる親のおかげです。このことを、夏休みに入る前に改めて確認することが大切だと思います。

毎週塾に行けたり、毎日通信教材で学習したりできるのは、親が月に何万も払ってくれているおかげということを頭に入れて、塾などに行かせてもらっていると考えると勉強するのが大切だと思います。

最後に、話は変わりますが、最近家の庭で父がトマトを栽培していて、一つ色づいてきたのでやっと思われたい、父は楽しみにしていました。父は楽しんで作っていたトマトがカラスに食べられてしま、今は実っているトマトが一つもなく、父はとても悲しんでいました。これでスピーチを終わります。ご清聴ありがとうございます。